LAST SNOW

札幌国際芸術祭

SIAF2024

SAPPORO INTERNATIONAL
ART FESTIVAL
Usa Mosir un Askay utar Sapporo otta Uekarpa

English Guide

会場ガイドブック

未来劇場

（東1丁目劇場施設）

2124—はじまりの雪—

2124 ―はじまりの雪―

未来劇場へようこそ。

札幌国際芸術祭は、長らく劇場として使用されてきたこの東1丁目劇場施設（旧北海道四季劇場）を、アートを通して未来を体験し、考え、行動するための芸術祭の拠点として「未来劇場」と名付けました。もともと演劇のための舞台だった空間、その舞台裏、楽屋や観客席といった劇場全体が、この展覧会「2124–はじまりの雪–」の舞台となります。

まずは未来へ。
これから100年、私たちはこの世界をどのように生きていくのでしょうか。初めに、みなさんをご案内するのは舞台へ続く長い通路です。音の「**タイムトラベル**」を体験して100年後の世界へとワープします。そして、その先の舞台に広がるのが「**未来の風景**」です。2124年、私たちは、テクノロジーの織り込まれた新たな自然とどのように共存しているでしょうか。一方、100年後も変わらない普遍的な世界とはどのようなものでしょう。
舞台の地下では「**時空の錬金術**」を体感します。さらにその舞台裏では、6組のアーティストが未来の人類をテーマに描く「**100年後の物語**」が展開されます。

そして現在へ。
私たちは地球規模の気候変動の真っ只中に生きています。「**今ある危機**」の舞台では、雪を起点にした循環に焦点を当て、世界の状況の断片と札幌の未来に迫ります。
最後に待っているのは、みなさんが未来に向けて行動を起こす「**未来ラボ**」です。未来劇場での旅を終えたみなさんは、かつて観客席だったこのラボで未来への「演者（アクター）」になります。

雪は天から送られた手紙である――中谷 宇吉郎

私たちは、雪という過去からつながる未来の手紙を、これからどう受け取り、どう答えていくのでしょうか。未来劇場の体験から生まれるそんな未来へのアクションは参加するみなさんの数だけ存在するはずです。この展覧会期間中に降る雪がみなさん一人一人の「**はじまりの雪**」となることを願っています。

〇さん（まるさん）：小川絵美子

タイムトラベル

未来を想像してくださいと言われたら、みなさんは、いつを思い浮かべますか。明日も未来ですが、未来劇場では100年後、さらにその先の未来を考えてみたいと思います。100年前の人々は「今」をどのように想像していたでしょうか。過去とつながっている現在から未来を想像する。ここからタイムトラベルを始めましょう。

タイトル未定

未来劇場に入って最初の作品は、通路に設置されたサウンドインスタレーション。張り巡らされたワイヤーに、数十個ものスピーカーが幾何学的に配置された空間に入ると、さまざまな音が響き合いながら出口に向かって複雑に変化していきます。本作では「移動と時間」に焦点をあて、入口を現在、出口を未来と設定しています。この通路を移動するには時間を伴いますが、進む速度はみんな違うでしょう。早くても遅くても止まっていても、そこに正解はありません。未来へ向かう「タイムトンネル」をそれぞれの時間で進んでください。

KOMAKUS（コマクス）
音響環境を追求するため、2019年より活動をスタート。商業施設、コンサート、演劇のほか、音楽家の鈴木昭男や詩人の吉増剛造、ノイズミュージックの刀根康尚らの作品の音響設計でも知られる「WHITELIGHT（ホワイトライト）」から派生。脱中心的な音響空間の創造を軸に活動している。

音で体験するタイムトンネル

展示空間を想定した模型（1/10）

SIAF 時空を超えるNFTスタンプラリーのイメージ

スタンプラリーに参加して作家をもっと知ろう！

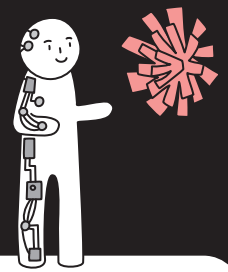
《SIAF 時空を超えるNFTスタンプラリー》

スタンプラリーを通じて未来劇場の出展作家をより深く知り、「時空を超える」体験をうながすプロジェクト型作品。「半永久的に残る」とも言われるNFTの技術とアートの力をかけ合わせた試みです。操作は簡単。まず各作品の横に設置されたQRコードをスマホで読み取り、手順に沿ってNFTを取得してください。そのNFTから作家インタビューや追加情報を見ることができます。帰ったあとに展示の余韻に浸りながら閲覧するのもおすすめ。スタンプラリーをコンプリートすると秘密の特典が自動付与されるかも……！?

施井泰平　SHII Taihei
美術家、起業家。2001年、「インターネットの時代のアート」をテーマに美術制作を開始。2014年、東京大学大学院在学中にスタートバーン株式会社を起業しアート作品の信頼性担保と価値継承を支えるインフラを提供。近年は東京都内で「SIZELESS TWIN」（2022年）や「ムーンアートナイト下北沢」（2022／2023年）などの展示を企画するほか、作家としても活動する。

未来の風景

アニメや小説などのフィクションの世界では、進歩的で明るい未来や、厳しい環境のなかで人々がなんとか生き延びていく暗い未来など、さまざまな未来の姿が描かれてきました。これらの多様な世界観を貫くテーマは「テクノロジーとの共存」でした。ロボットや機械は将来、人や電気から解放され、自らの意思を持ち、自律的に動くようになるのでしょうか。そして、私たちの周りにはどのような世界が広がり、そのとき人類はどうなっているのでしょうか。



循環を見守る機械仕掛けの生きもの

《穴の守護者》2011
courtesy of the artist

《穴の守護者》
《無限の穴》
《素敵に枯れていきたい、君と。》

チェ·ウラムによる3つの作品は、それぞれに違う動きをみせながら、一つのインスタレーション空間をつくり上げています。息をするかのように伸縮をする《穴の守護者》は、チェ·ウラムを代表する「anima-machine」シリーズの一つで、機械仕掛けでありながら、まるで生物のような動きを見せます。チェによればこの《穴の守護者》が唯一の意識ある存在としてこの空間で起きている循環を見守っています。舞い落ちる“花弁”はゆったりと床に届き、それが雪であれば水となり、果てしなく続く“穴”に流れて、またいつか空にのぼり——。みなさんにはどのような風景に見えてくるでしょうか。

小川ディレクターより

僕が「未来の風景」を想像したときに、まず思い浮かんだのがチェさんの作品。韓国を代表するアーティストで、日本のアニメーションにも大きな影響を受けたとお話しされていました。その作品の魅力は、繊細につくられた機械にありますよね。宙に吊られた花弁の作品は新作。また、観客席にある《Red》もこの会場にインスピレーションを受け、自ら提案してくれました。機械仕掛けの生き物が魂を持って自律的に動く未来の風景……。そこに人間はいるのだろうか？そんな「未来の風景」に私たちを連れていってくれるはずです。

Photo:
KIM Young Jun

チェ·ウラム CHOE U-Ram

1970年、韓国ソウル生まれ。1992年中央大学彫塑科を卒業。1999年同校にて修士号取得。1990年代初頭から活動を開始し、2006年には韓国人のアーティストとして初めて森美術館にて特集展示に参加。自ら設計、製作する精巧な機械によって動作する有機的な作品は、人間の存在意義やテクノロジーと人間の共存について問いを投げかける。繊細な作品は国内外で人気を博しており、韓国、日本を始め、米国、オーストラリア、トルコなどで展覧会が開催されている。

ディレクターイラスト：坂本奈緒

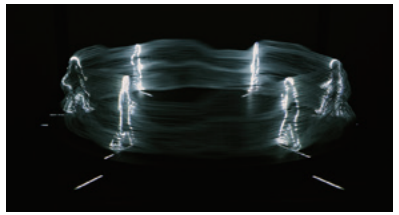
時空の錬金術

かつて錬金術師たちは、化学的手法を使って金以外のものから金をつくり出そうとしていました。その過程で発見されたことの多くが、今日まで続く技術の基礎になったと言われています。アーティストは時に、私たちに身近な素材から、見たこともない風景や現象を目の前に出現させます。その背景には、そのための絶え間ない探求と鍛錬、そして現代の最先端の哲学観や技術が複雑に絡み合っています。それはまるで現代の錬金術師のようです。100年後も変わらない時空の錬金術とはどのようなものでしょうか。

私たちはどこへ向かう？

《In motion》

奈落に続く階段を降りた先の部屋。中に入ると、人の歩く姿などが浮かび上がってきます。よく見ると回転するメッシュ状の立体物に光が当たることで映像になっています。多方面に向かって一歩を踏み出す人や、他人が他人に入れ替わりながら歩く人々。さまざまな作品が展示されています。これまで私たちは「一歩」を踏み出すことで新たな道を切り開き、移動や旅を続けながら歴史をつくってきました。そこには受け継がれてきた物語と時間が内包されています。多様で複雑な現代において、これから私たちはどこへ向かっていくのでしょうか。

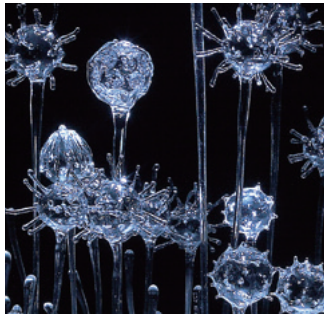


展示イメージ　Photo: Timothée LAMBRECQ

後藤映則 GOTO Akinori

1984年、岐阜県生まれ。古くから存在するメディアや素材から現代的なテクノロジーまでさまざまな手法を掛け合わせ、動きや時間、生命感を扱う作品を手掛けている。

目には見えない生命の力



《her songs are floating》2007
Photo by KOMAKI Yoshisato

《starting from light coming back to light》他

粘菌やウイルス、細胞、花粉など原始的な生命のかたちが、緻密なガラスの技術で表現されています。この作品をつくった青木美歌は美大生だった学生時代に素材としてのガラスに出合いました。ガラスは熱を加えると柔らかく、さらに高温で液状になります。物体そのものは透明でありながら、光や周囲の風景を映し出す特性もガラスならではのものです。青木はこれらの性質が「見えるものと見えないもののあいだ」を探究する自身の制作に適していると考えました。自然への深い敬意を抱いた青木。地球の誕生から続く生命のつながりをガラスという素材に託して伝えます。

青木美歌 AOKI Mika

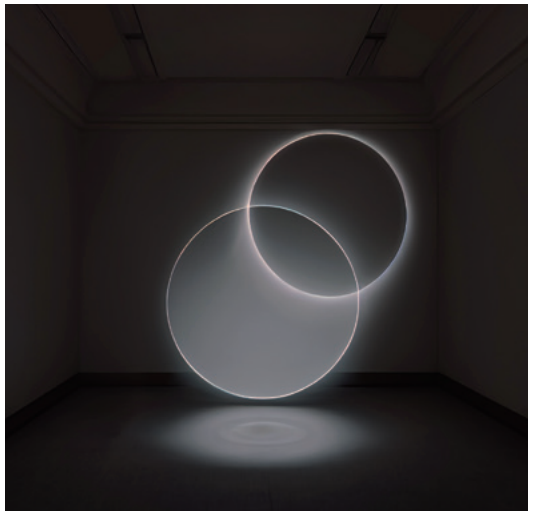
1981年、東京都生まれ、北海道育ち。2006年、武蔵野美術大学工芸工業デザイン専攻ガラスコース卒業。2013年、ロイヤル·カレッジ·オブ·アート（ロンドン）修士課程修了。原初的な生命のかたちをガラスで表現し、目に見えない生命の力を伝える。2022年没。

小川ディレクターより

後藤さんの代表作「toki-」シリーズを初めて見たときの衝撃は今でも忘れられません。アニメーションの一コマ一コマを3Dプリンターで連結したオブジェとしてプリントし、そこに一筋の光を投影することで、その「もの」に時間が宿る。単純な仕掛けなのに、魔法のようではありませんか？「錬金術」とは、芸術と科学が分類される前の時代に存在した、人間だからこそできる創造的な「夢と欲望」の技術だと思うんです。人間の本質のそのものを「錬金術」というテーマで後藤さんと青木さんに託しました。

100年後の物語

今、私たちが生きている世界は、過去に生きた人々のさまざまな想像力によって創られてきました。2024年の想像力が2124年の世界を創り出すとしたら、どんな物語が未来の可能性を切り開くのでしょうか。人類は、どんな装いで、何を食べ、どんな場所で暮らし、どのように生まれ、どのように死んでいくのか。人類は、何とどうコミュニケーションし、どのような方法と手段でどこに向かうのか。そして、人類は、何を信じ、どのようなコミュニティーで生き、どんな知性がその世界を統治しているのか。6人のアーティストが描く100年後の物語を読み解いていきましょう。



展示イメージ

肉体がなくなっても、後に残すべきものとは

《存在の谷からのエコー》

エイミー･カールは、人工知能などのデジタル技術と生物学や量子物理学などの科学的知識と新世代のアートとを組み合わせ、テクノロジーによって拡張された未来における人間存在の儚さを探求しています。本作はデジタル技術とバイオテクノロジーの融合により、肉体の死後もバーチャルな世界で生き続けることが可能になった100年後の未来という世界観でつくられました。日食に発想を得たこのインタラクティブな作品は、来場者の動きや入力情報に反応し、生物学的かつデジタル化された来場者の痕跡を可視化します。デジタルな要素が人間の身体や存在、環境に浸透することで生と死、人間と機械の境界が曖昧になった世界で「LAST SNOW」はどういった意味を持つのでしょうか。肉体の消滅後もデジタル化された遺物が長く存在するとしたら、私たちは次世代に何を残すべきなのでしょうか。

エイミー･カール
Amy KARLE

テクノロジーとバイオテクノロジーが、健康、人間性、社会、未来にどのような影響を与えるかに焦点を当てて作品を制作している。未来をかたちづくるテクノロジーの可能性を垣間見せるカールの作品は、世界中の主要な美術館や博物館で展示されている。これまでに米国務省を通じてアーティスト外交官を務め、2019年にはBBCによる世界中の刺激的で影響力のある「100人の女性」の一人に選ばれた。また、生命の多面的アーカイブとして作品を月面にプロジェクトに参加している。

6つの問い

「100年後の物語」のエリアは、100年後の「〇〇」という具体的なテーマをもとに、僕が6組のアーティストを指名しました。アーティストが構想する6者6様の100年後の物語をショートストーリーのように楽しんでください。

More Information

「100年後の物語」をキーワードと思想史で読み解く解説をオンラインでお読みいただけます。 文:佐野和哉　監修:久保田晃弘

- エイミー･カールさん「生と死」
- シン･リウさん「移動と宇宙探求」
- スーパーフラックス「コミュミケーション」
- テガ･ブレインさん ほか「人工知能と統治」
- 中里唯馬さん「衣食住」
- 長谷川愛さん「信頼とコミュニティ」

《Asunder》 Photo: Luca GIRARDINI, CC NC-SA 4.0.
Exhibition views from the The Eternal Network, transmediale 2020.

AIが地球を統治したら

《Asunder》

私たちが住む地球は重大な環境問題に直面しています。現代社会の複雑な課題を解決し、環境を管理する能力をコンピュータに与えるとどうなるでしょうか。最先端の気候･環境シミュレーション技術、スーパーコンピュータ、機械学習による画像作成技術を組み合わせた本作は、中立的で政治色を持たないAIの「環境管理者」に地球の健康を管理する権限が与えられた結果を提示します。そこでは、都市や河川、森林の移動、国同士の統合、海岸線の直線化などの不条理な解決策が提示されていきます。コンピュータの中立性、テクノロジーに依存することや環境をひとつのシステムとして見ることの是非を問いかけます。

The project was commissioned by the MAK for the VIENNA BIENNALE 2019.
This edition of Asunder was created with the support of the Asia Digital Art Exhibition.

テガ･ブレイン＋ジュリアン･オリヴァー＋ベングト･ショーレン
Tega BRAIN + Julian OLIVER + Bengt SJOLEN

テガ･ブレインは、オーストラリア出身のアーティスト、環境エンジニア。世界各地で作品を発表しており、ニューヨーク大学で総合デザイン･メディア学科の准教授を務めている。ジュリアン･オリヴァーは、クリティカル･エンジニア、教育者、アーティスト、活動家。文化庁メディア芸術祭などへの出展多数。2011年にはオーストリアのアルス･エレクトロニカで最優秀賞を受賞。ベングト･ショーレンは、ストックホルムおよびベルリンを拠点に活動するソフトウェアおよびハードウェアのデザイナー、ハッカー、アーティスト。その作品はアルス･エレクトロニカやNTTインターコミュニケーション･センター［ICC］などで展示されている。

現代のゴミと縄文時代の貝塚を重ね合わせ、100年後の衣食住を想像する

《ゴミ、或いは弔い》

ファッションデザイナーである中里唯馬は、2022年にケニアにあるゴミの山を訪れました。大量の衣服と共に、あらゆるゴミが集められている光景に絶望的な気持ちになりましたが、ゴミの山に餌を求めて集まる動物たちの視点を想像しながら眺めてみると、壮大な生命の循環の一部を見ているようにも感じたのです。その後、北海道の貝塚を巡り、食し食されるもの同士が分け隔てなく同じ場所に葬られている様子に出合い、縄文時代におけるゴミとは「命を弔う」という、現代とは全く異なる捉え方をしていたことを知ります。私たち人類の100年後のゴミのあり方から、衣食住のあり方を問いかけます。

技術協力:セイコーエプソン株式会社

Photo: NAKAZATO Yuima

中里唯馬
NAKAZATO Yuima

1985年、東京都生まれ。ファッションデザイナー。ベルギー･アントワープ王立芸術アカデミーを卒業後、ファッションブランド「YUIMA NAKAZATO」を設立。2016年、日本人として森英恵についで史上2人目となるパリ･オートクチュール･ファッションウィークの公式ゲストデザイナーに選ばれ、以降パリでコレクションを発表。テクノロジーとクラフトマンシップを融合させた服づくりを提案し、近年は世界中からケニアに集まる使用済みの衣服からアップサイクルしたコレクションも制作。

女性の身体から宇宙まで

《The Mothership》2023

《Gleaming Bodies》

没入型の展示空間で構成されたシン·リウの《Gleaming Bodies（かすかにきらめく身体）》は、女性の子宮を宇宙の創造源として捉え、生命の永続性や、テクノロジーがもたらす人智を超えた可能性を考察しています。白い床が下から光を放つ部屋の中央に置かれた《The Mothership》は、人類が生来持っている「種を維持し繁殖させる」という願望を探究するもので、人体の冷凍保存や卵子凍結といった生物学的·医学的な技術革新や、多様な遺伝子を未来に残すことを目的にした精子バンクに着想を得ています。また、表面に薄い霜の層をつくる冷却装置を組み込んでおり、南極大陸の氷河湖や、木星や土星を周回する衛星にある氷に覆われた海の未知なる生命体の探究にもつながります。

協力：MAKE ROOM

Photo: Zhaoyin WANG

シン·リウ Xin LIU

1991年、中国·新疆生まれ。アーティスト、エンジニア。マサチューセッツ工科大学（MIT）のメディアラボにてメディアアート·サイエンスの修士号を取得。現在同ラボの宇宙研究プロジェクトのアートキュレーターを務める。また、地球外生命の発見を目的とした非営利組織SETI研究所にもアーティストインレジデンスとして招聘されている。最近は、地球の新陳代謝、またこの数十年のテクノロジーが地球に与えてきた影響などをテーマに研究を行っている。

小川ディレクターより

「100年後の移動と宇宙探求」という僕からの問いかけに、シンさんは身体を伴わない「遺伝子の旅」をテーマに制作してくれました。そのイメージは、宇宙を移動する「ノアの方舟」。未来の宇宙船で私たち人類はどのように旅をするのか。シンさんと初めて会ったとき彼女はMITメディアラボの学生でした。宇宙や生命科学など最先端科学とアートを結びつけ、「人とはなにか」という芸術的な探究を行っています。

人間／非人間的をめぐる冒険

《Multiple Futures》2023
3D data CC:River Otter - FW6091 by Oregon State University Ecampus

長谷川 愛 HASEGAWA Ai

静岡県出身。アーティスト、デザイナー。慶應義塾大学准教授。バイオアートやスペキュラティヴ·デザイン、デザイン·フィクションなどの手法で、生物学的な課題や科学技術の進歩をモチーフに、現代社会に潜む諸問題を掘り出す作品を発表。国内外で展示を行う。著書に『20XX年の革命家になるには――スペキュラティヴ·デザインの授業』（ビー·エヌ·エヌ新社、2020年）ほか。

《Multiple Futures》

舞台は2124年の札幌。森の生態系が大きく変わり、降雪も2～3年に一度という世界で、参加者はVR によってキャラクターになりきり冒険に出かけます。そこでは「人間とは何か」といった考え方や価値観も変化し、人は絶滅した動物を信仰するコミュニティをつくっています。「非人間」的に生きる価値観が浸透した世界での冒険を経て、VRグラスを外した後、自由な意志やアイデンティティといった人間として当たり前とされている概念はどんな意味をもつでしょうか。

制作協力：京都工芸繊維大学 未来デザイン·工学機構／Center for the Possible Futures KYOTO Design Lab（水野大二郎·小野里琢久）、慶應義塾大学 理工学部 機械工学科 総合デザイン工学専攻

都市の廃墟に暮らす

スーパーフラックス
Superflux

ロンドンを拠点とするスペキュラティブ·アート&デザイン·スタジオ。今日人類が直面する課題に詩的な解釈を与える。2009年にアナブ·ジェインとジョン·アルダンが設立。初期の作品は、実験的なデザイン手法を新たな観衆に提示した。挑発的で没入感のある作品は、ロンドンのバービカンやV&A博物館、MoMAニューヨーク、ヴェネチア·ビエンナーレなど世界各地で展示されている。また、グーグルAI、英国内閣府、アラブ首長国連邦政府、イケアといった組織のために未来志向作品を制作している。2021年にはDezeenのDesign Studio of the Year Awardを受賞するなど、世界的な賞を受賞している。

《Refuge for Resurgence》は、CreaTures（変容する未来のための創造的実践）の活動の一部として、EUの研究·イノベーションプログラム「ホライズン2020」から資金援助を受けています。

《Refuge for Resurgence, Window View》
Concept and artwork: Superflux. Video production: Cream Projects

《Refuge for Resurgence, Window View》

窓から街を見ると――旧世界は海中に沈み、廃墟と化しています。ここはあらゆる種が共存する、暑く湿った、オーガニックな都市。窓から聞こえてくる音に耳を澄ますと、復活の希望があることがわかります。本作は、生態系の相互依存と超人間的な未来をテーマとする“複数種による晩餐会”を想定したインスタレーション作品《Refuge for Resurgence（復活のための避難所）》の一部で、窓から見える風景です。想像力の上に築かれた新しい住処、嵐を切り抜け、洪水から浮上し、暑さに耐える強い住処。その窓からはあらゆる種が居場所を取り戻すことができる世界の風景を垣間見ることができます。

今ある危機

2023年、世界各地で「災害レベル」という形容詞が使われ、札幌でも36.3度という観測史上最高気温を記録しました。その状況を地球が沸騰しているという専門家もいました。46億年の地球の歴史の中で、人類は最後に登場した存在ですが、何億年もかけて変化してきた地球の地層レベルに、私たちの活動が劇的な影響を与えていることが明らかになりつつあります。この地層年代は「人新世」（アントロポセン）と呼ばれるようになりました。改めて、現代の私たちは「人新世」をどのように捉えることができるのでしょうか。

保護と破壊の葛藤

《Invisible Mountain》2021

《Invisible Mountain》

イタリアのアルプス山脈では、2008年から氷河の融解を遅らせるための活動が行われています。ターポリンを使って毎年5〜6月にかけて山の雪を覆うことで、雪解けを最大60%抑えます。2020年には10万㎡もの面積を覆いました。しかし皮肉なことに、この保護布は環境に負荷がかかるプラスチック製であり、劣化のため2年に一度交換しなければなりません。環境問題に関心を寄せる建築家、ジョヴァンニ·ベッティとカタリーナ·フレックによる今回の展示ではこのターポリンの一部が山の稜線を描くように舞台の天井から吊り下げられ、消えゆく山の存在を間接的に伝えます。また、変化する地形を表す方法として、雪解け水の流れを考慮し、気温上昇により発生する氷雪藻の色を元に作成されたデジタルグラフィックも展示されています。環境を守るための行動が環境破壊につながるという矛盾がつくり出すインスタレーション作品です。

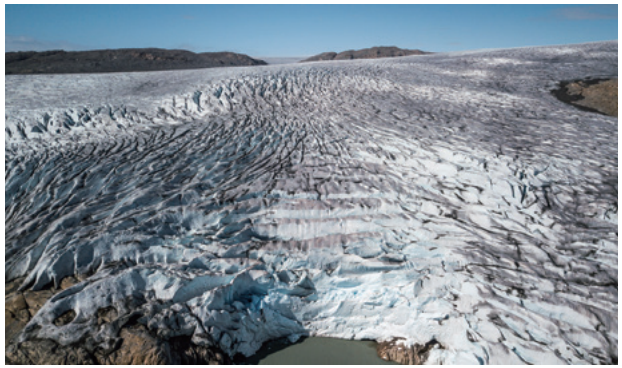
助成：イタリア文化会館 東京

ジョヴァンニ·ベッティ＋カタリーナ·フレック
Giovanni BETTI + Katharina FLECK

ドイツ·ベルリンを拠点に活動するジョヴァンニ·ベッティとカタリーナ·フレックによる建築家デュオ。人類が地球環境に大きな影響を与える「人新世」と呼ばれる現代、人工の世界と自然界の境目が曖昧になりつつあるなかで建築の存在意義に光を当てた作品を生み出している。「ソウル都市建築ビエンナーレ」やベッティが客員教授を務めるベルリン芸術大学などの国際的な展覧会に出展しており、2021年の「第17回ヴェネチア·ビエンナーレ国際建築展」では《Invisible Mountain》を展示し、国内外から注目を浴びた。

小川ディレクターより

2021年のヴェネチア·ビエンナーレ国際建築展で初めて見た作品です。いまアルプスでは気候変動によって氷河が溶け、土砂崩れや雪崩などが深刻な問題となっています。氷河の融解を防ごうとする活動は、テクノロジーの成果を表しますが、一方で自然環境に負荷をかける可能性もある。こうした矛盾と問いを視覚化したプロジェクトなんです。



《Rise: From One Island to Another》

2人の詩人が紡ぐ故郷の詩

キャシー·ジェトニル＝キジナー ＋ アカ·ニワイアナ
Kathy JETÑIL-KIJINER ＋ Aka NIVIÂNA

キャシー·ジェトニル＝キジナーは、マーシャル人を祖先に持つ詩人。2014年にニューヨークで行われた国連気候サミットの開会式で詩を朗読し、国際的に高い評価を受ける。また母国を脅かす気候変動の解決を目指し、NGO代表としてマーシャル諸島の若者育成に努める。アカ·ニワイアナはイヌイット族の作家。映像作品への参加は今回が初となる。気候変動のほか、植民地主義、先住民の権利にまつわる詩の作成を通し、対話の醸成を目指す。

《Rise: From One Island to Another》

中央太平洋に位置するマーシャル諸島共和国出身の詩人、キャシー·ジェトニル＝キジナーと、北極海と北大西洋の間に位置するグリーンランド出身のイヌイット族作家、アカ·ニワイアナが共同で作成した詩を朗読している映像作品《Rise: From One Island to Another（Rise: ある島国からもうひとつの島国へ）》。地球の温暖化により、マーシャル諸島は海面上昇の危機に瀕し、グリーンランドでは氷河の融解により国土が失われつつあります。また、冷戦時代にマーシャル諸島のビキニ環礁とエニウェトク環礁では、アメリカが合計67回の核実験を行い、その中には批判の的となった1954年の熱核水爆「ブラボー」もありました。それぞれの国の美しい風景を背景に、祖先の土地に対する思いを運ぶ詩をお互いに朗読することで、危機に立ち向かうための連帯を呼びかけます。気候変動の脅威が、遠い場所の住人に襲いかかる不運ではなく、地球に住む誰もが積極的に立ち向かわなければならない課題であることを訴えます。

展示監修：グレッグ·ドボルザーク　「Rise」日本語訳：管 啓次郎　展示協力：マユンキキ

巨木のライフサイクル

《WORMHOLE》

北海道の巨木――直径1メートル以上の朽ちかけた丸太を、チェーンソーやナタ、ノミ、ヤスリなどで削り制作された彫刻です。展示空間に響く音は、朽ちてゆく木の様子が浮かび上がるようです。白老町（しらおいちょう）の飛生（とびう）地域にアトリエを構える国松希根太は、歩く中で目にする山や岩、洞窟などの風景から抽出されたイメージを彫刻に刻むように表現しています。今回の展示のため、国松は道内をめぐり巨木を探しました。そこで、何百年も同じ場所に立ち続け、朽ちてはまた再生する生きた木の姿に出合ったことから「時間」を題材に制作しました。「WORMHOLE（ワームホール）」とは虫喰い穴であり、2つの時空をつなぐ概念。実際に作品の細部を見ると虫喰い穴も確認できます。何十年、何百年と生きてきた巨木の姿から、この先の未来を想像してみてください。

飛生のアトリエでの《WORMHOLE》制作風景 2023年11月

Photo: SASAJIMA Yasuhito

国松希根太 KUNIMATSU Kineta

1977年、札幌市生まれ。地平線や水平線、山脈、洞窟など風景の中に存在する輪郭（境界）を題材に、彫刻を中心に絵画やインスタレーションなども制作する。多摩美術大学美術学部彫刻科を卒業後、2002年より白老町にある飛生アートコミュニティーを拠点に活動。アヨロラボラトリーの活動としてアヨロと呼ばれる地域を中心に土地のフィールドワークを続ける。

《Remains: Vallée de Joux》2018 Photo: Franz WAMHOF

スイスの森をレーザースキャナーで写しとる3D絵画

小川ディレクターより

クアヨラさんとは、僕の拠点でもあるアルス·エレクトロニカで何度も会ってますが、常に新しい表現技法を探究しているアーティストです。絵筆や絵具の代わりに使うのは最先端のテクノロジー。今回の作品はスイスの渓谷の風景で、気候変動によって変容するアルプスの環境を「ポイントクラウド」という技術で丸ごとスキャンしてます。「私たちはいまある危機にどう立ち向かえるのか」と考えたとき、変わっていく地球の姿を最先端の技術を使って表現するクアヨラさんの作品には、人間の目ではとらえきれないものを伝える力がありますね。

《Remains: Vallée de Joux》

クアヨラは、西洋の伝統的な風景画に着想を得た現代のテクノロジーによる挑戦的な作品を次々と発表しています。展示されているのは、残骸や遺物を意味する「Remains」というプロジェクトのひとつで、スイスのジュー渓谷にある人里離れた森を記録したものです。作家によれば、これは自然界とアルゴリズム的ロジックの調和を探求し、人間と機械の新しい創造的関係を考察した作品です。白黒で表現された風景は一見すると水墨画のようにも見えますが、近づくとデジタル処理によって生まれる無数の細かいポリゴンで成り立っていることがわかります。実は木々が生い茂る実在の風景を高精度の3Dレーザースキャナで読み取り、大判の布に高解像度で印刷することでつくられています。19世紀の風景画家らが自らの目で自然を観察し、絵画の技術をもって描いたプロセスを、現代の技術を使って踏襲し、新たな表現に昇華しました。

クアヨラ Quayola

テクノロジーを用いて現実と人工、具象と抽象、古いものと新しいものなど、一見すると相反する力の間に生まれる緊張感と均衡を探究している。その作品は、風景画や古典的な彫刻、肖像画といった伝統的な芸術から出発し、現代の技術と組み合わせることで生み出される。これまでに東京の国立新美術館で開催された文化庁メディア芸術祭の作品展をはじめ、世界各地でパフォーマンスや展示を行っており、2013年にはオーストリアのアルス·エレクトロニカで最優秀賞を受賞している。

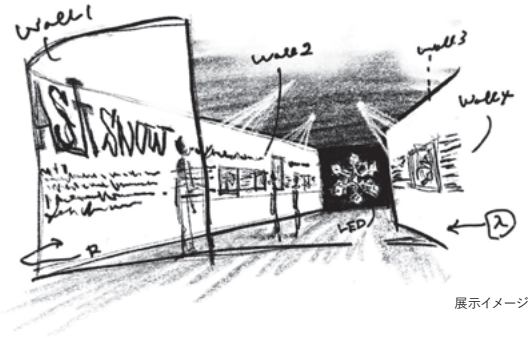
《Red》Photo by Jihyun JUNG

花は静かに見つめる

《Red》

客席と同色の真っ赤な花が、ゆったりと大きく咲き誇り、そして静かに閉じながら朽ちてゆく、その様子が繰り返されます。古い神話によれば、神からほとばしる血のイメージから、赤は新しい命の象徴としても捉えられます。そのパワーを発するかのように《Red》には強い存在感があります。作品の動きをじっと見ながら、耳を澄ますと、カサカサという何かが擦れるような音がします。菊がイメージされた花の花弁には、パンデミック禍を支えていた医療従事者の防護服に使用されていたタイベックという素材が使われています。生と隣り合わせの死。世界のどこにいてもどの時代でも普遍的な生と死、そしてそれが循環するイメージがこの花に込められています。

チェ·ウラム
CHOE U-Ram
「未来の風景」参照



展示イメージ

ワビサビ Wabisabi

1999年に工藤"ワビ"良平と中西"サビ"一志によって結成。アートディレクター、グラフィックデザイナー。札幌を拠点にアドバタイジングから、グラフィックデザイン、オブジェ、映像、ファッション、インテリアまで多方面での制作を行っている。NY-ADC やJAGDA新人賞など国内外で受賞多数。「札幌国際芸術祭」では2020年と2024年のロゴとシンボルマーク、アートディレクションを担当。

数字で見る、未来の札幌

《LAST SNOW》

SIAF2024のアートディレクションを手がけるワビサビは、「LAST SNOW」がテーマであることから「雪の結晶」をメインビジュアルとしました。その「雪の結晶」を未来へと繋げる展示室です。実際の雪の結晶を、世界で初めてつくり出した人物として知られる物理学者の中谷宇吉郎(1900-1962)博士を中心に、雪とは何か。そして、雪と密接な札幌という都市のあり方、さらには博士が礎をつくった北海道大学低温科学研究所の先端研究も紹介します。

監修:古川義純(中谷宇吉郎 雪の科学館館長)
協力:札幌市青少年科学館(公益財団法人札幌市生涯学習振興財団)、中谷宇吉郎記念財団、中谷宇吉郎 雪の科学館、北海道大学低温科学研究所

未来ラボ

いよいよ旅も終わりに近づいてきました。この場所は、演劇を楽しむ鑑賞者で溢れるはずの観客席です。通常、観客席は舞台を見つめる場所ですが、今日は未来を創造する演者（アクター）として、赤い花のように鮮やかな椅子に座ってみましょう。このラボでは、これからの未来を書き、コーディングし、描く「未来のための道具」を体験できます。絶え間なく流れる時間のなかで、過去における行動が現在につながり、現在における行動が未来につながる。この劇場を出た後みなさんの行動が、2124年の世界に影響をあたえるはずです。

AIとの文通で未来に手紙を書こう

《WRITING THE FUTURES》

「未来の誰か」に向けて手紙を書き、AIと手紙をやりとりしながら未来を構想するウェブアプリケーション。参加者は最初にスマートフォンで「未来への手紙を書く」か「未来からの手紙を受け取る」を選びます。「未来への手紙を書く」では、未来への希望や想いを手紙という形で「未来の誰か」に送り、「未来からの手紙を受け取る」ではAIが生成した手紙が届き返事を書くことができます。この手紙のやりとりはアニメーションに変換され、会場内のディスプレイに表示。人間だけでは思いつかない「未来の物語」を生み出すツールから、人類とAIが共創するこれからの社会を想像していきます。

h.o（エイチ·ドット·オー）

ヨーロッパ、日本、アメリカを拠点に活動する、さまざまなバックグラウンドを持つメンバーたちによるアーティスト集団。2000年に活動を開始。「Sense the Invisible（目に見えないものを感じ取る）」をコンセプトに、技術進歩のスピードに合わせた、目に見えない事象を顕在化する実験的プロジェクトを多く手がける。SIAF2024のディレクター、小川秀明もメンバー。

《Last Ink》展示会場イメージ

wacom
株式会社 ワコム
Wacom Co .,Ltd

1983年に埼玉県で設立された、ペンタブレットのメーカー。デジタルペンの技術を通して、さまざまな「描く·書く」体験を実現する。世界150以上の国と地域で、映画制作や工業デザインのスタジオ、デザイナー、マンガ家などのクリエイターのほか、趣味でイラストや写真加工を楽しむ人まで幅広く愛用されている。近年は学校や塾など教育の現場、医療現場での電子カルテ等の記入、金融機関等での各種申込書、クレジットカードの電子サイン用にも使用。アルス·エレクトロニカと2020年よりパートナーとして連携。

「描く」「書く」をつなげていく

《Last Ink》

ホワイエと劇場内シアターの一角、ここは自由に絵や字を描くことができる空間です。クレヨンや色鉛筆、もしくは液晶ペンタブレットとデジタルペンを使い、参加者が思いのままに描いた絵が空間を彩ります。絵を描く、文字を書く。こうした「かく」という行為を、人間は何万年も前から行ってきました。株式会社ワコムが志を共にした多くの仲間とともに、この日々の描くこと、書くことの積み重ねが歴史をつむいできたという思いで企画しました。SIAF2024の「イニシアティブパートナー」として、「Last Ink」というテーマのもと、「かく」ことで、どう未来につながっていくのかを一緒に考えていきます。

エコデザイン協力：大日本印刷株式会社
協力：DSC（デジタル·ステーショナリー·コンソーシアム）、株式会社ベルシステム24ホールディングス、株式会社セルシス、合同会社伊藤維建築設計事務所

こんな雪の結晶、みたことない！
プログラミングでつくる雪景色

《自分だけの雪の結晶、ゆきフレーム》

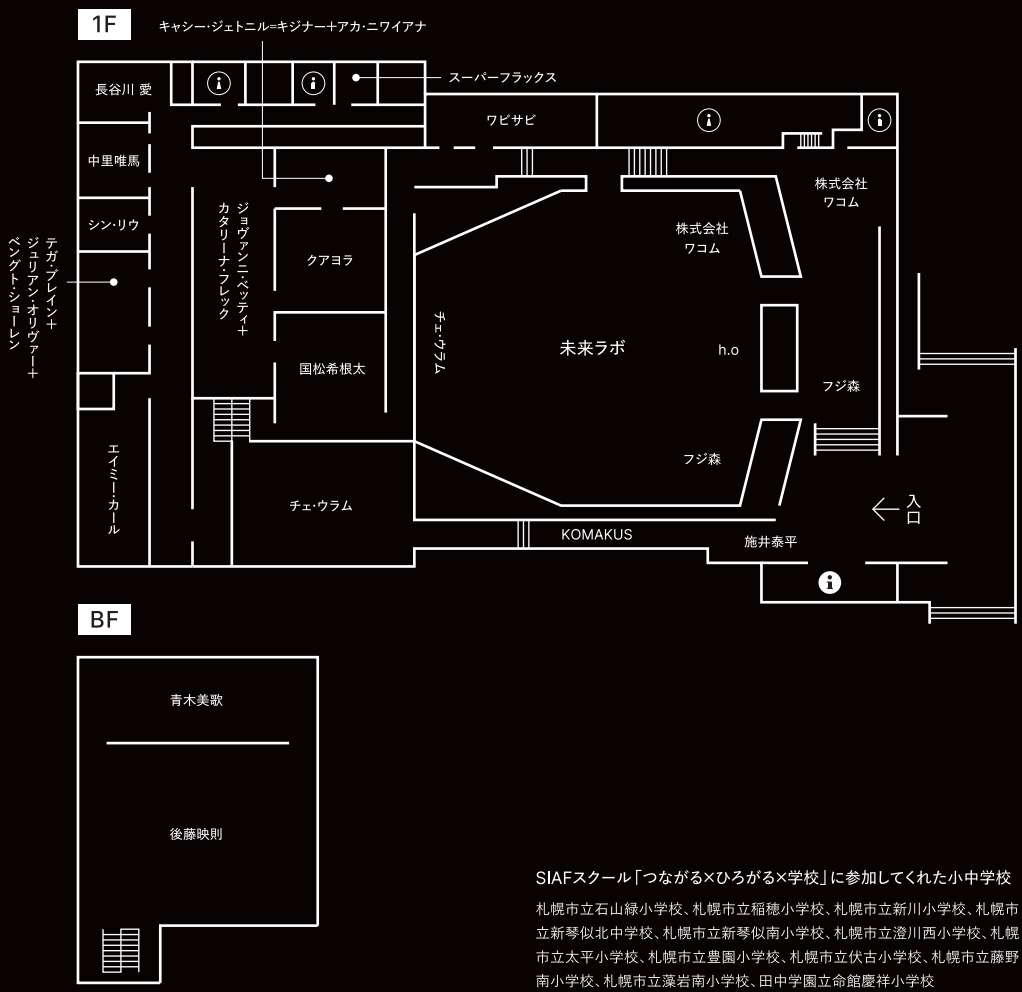
最後に登場するのは、会場入り口でも目にした映像作品です。雪が降り注ぐスクリーンに近づくと、自分の影の中の世界にさまざまな雪の結晶が舞い上がります。色も形も異なる無数の結晶は、ワークショップと公募を通してアプリケーションでつくられた「自分だけの雪の結晶」。座標に点を描くプログラミングにより、命令文字を入力することでプログラミング初心者でも簡単に雪の結晶をデザインできるアプリケーションは、アート·ユニットのフジ森によって開発されました。雪の結晶をつくったのは「SIAFスクール」の一環として参加した札幌市内の11の小学校と1つの中学校、あわせて853名の子どもとオンラインの参加者たち。最初は「プログラミングって難しそう」と思っていた子どもたちも、コンピュータを使い自然界にはないユニークなデザインの結晶を生み出しました。

展示イメージ

フジ森 Fujimori

藤木淳と藤木寛子の夫婦によるインタラクティブ·アート·ユニット。札幌を拠点に活動。2014年より合作を始め2019年よりユニット名を「フジ森」とした。構想はそれぞれで持ち寄り、淳がインタラクティブ設計、寛子がビジュアル構成を担当。参加型のアート作品を展開している。2023年に北海道立近代美術館の企画展「トリック×イリュージョン!」に出展するなど道内での活動のほか、国内外各地で多数の展示やプロジェクトに参加。

未来劇場｜会場マップ



SIAFスクール「つながる×ひろがる×学校」に参加してくれた小中学校

札幌市立石山緑小学校、札幌市立稲穂小学校、札幌市立新川小学校、札幌市立新琴似北中学校、札幌市立新琴似南小学校、札幌市立澄川西小学校、札幌市立太平小学校、札幌市立豊園小学校、札幌市立伏古小学校、札幌市立藤野南小学校、札幌市立藻岩南小学校、田中学園立命館慶祥小学校

2124―はじまりの雪―

会　　場　未来劇場［東1丁目劇場施設］（札幌市中央区大通東1丁目）
開館時間　10:00～19:00（雪まつり期間 2/4（日）～11（日・祝）は21:00まで）
会　　期　2024年1月20日（土）～2月25日（日）
休 館 日　無休

主催：札幌国際芸術祭実行委員会、札幌市

札幌国際芸術祭実行委員会事務局
〒060-0001 札幌市中央区北1条西2丁目札幌時計台ビル10階　TEL：011-211-2314 ｜ E-mail：info@siaf.jp
@SIAF_info　@siaf2014info　@siaf_info　札幌国際芸術祭/SIAF　https://2024.siaf.jp

SIAF2024
公式ウェブサイト